

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K13026

研究課題名(和文) 学校教員への最新保健研究情報提供システムの構築と評価・普及

研究課題名(英文) Developing a system to provide school teachers with new research information about school health from abroad

研究代表者

佐々木 司 (Sasaki, Tsukasa)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授

研究者番号：50235256

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：近年、優れた保健研究の多くは英文国際誌から発信されている。従って重要な学校保健情報を得るには、国際誌の英文論文情報に接する必要がある。本研究は、我が国の学校教員に保健に関する英文研究情報を提供するシステムを構築、実際の情報に親しみつつ教員の海外情報への認識と、情報を吸収する力を高めることを目的に実施した。情報提供の方法については、教員の英語への苦手感と研究への馴染みの薄さを十分考慮し、かつ教員からのフィードバックを得ながら工夫した。研究紹介の実施は、まず教員参加も多い学会機関誌を使って試行し、最終的にはweb上で公開・配信できるシステムを構築した。

研究成果の概要(英文)：Most of major health studies, including Japanese ones, are recently published in international journals in English. Few Japanese school teachers are familiar with such studies, possibly due to lack of recognition of their importance and of the linguistic knowledge. The present study aimed to improve this situation, by developing a system to provide Japanese teachers with an opportunity to contact major health information in international journals, and to raise their recognition of its importance and skills of reading papers in the journals. How to best explain and introduce health information from international journals to teachers were examined. Methods to make the teachers feel familiar with English information were also studied. After several tests with concise and plain explanation of English studies in a Japanese journal, a web-system was developed to more widely provide the teachers with such information.

研究分野：学校精神保健

キーワード：学校教員 保健 知識向上 海外文献 論文理解力 英語力

1. 研究開始当初の背景

わが国の研究を含め、優れた保健研究のほとんどは英文で書かれ国際誌を通じて発信されている。従って新しく重要な学校保健の情報を得るには、国際誌に掲載された英文論文の情報を接する必要がある。一方、我が国の学校教員の多くは英文で国際的に発信された情報の重要性に対する意識が低く、国内情報にのみ注意が向きがちである。また実際に学校教員と話してみると、英語への苦手意識が強い人が多く、仮に英文論文を読むように勧めたとしても現実的ではない。ただこのような重要な情報源への接触の不足は、かつての運動中の飲水禁止や、最近の組体操への熱中など、わが国の学校に独特の、保健に関わる間違った常識や慣行につながっている可能性もある。

2. 研究の目的

上記背景に鑑み、本研究は、我が国の小中高の学校教員に、学校保健に関わる海外の新しい英文研究情報を提供するシステムを構築し、学校教員が英文の最新情報に親しむ機会を提供するとともに、英文を含めた海外情報の重要性を認識し、それを吸収する力を高めようとの意識に目覚めてもらうことを目的に実施する。

3. 研究の方法

(1) まず、どのような内容の情報が学校教員の興味を引くか、またどのような示し方が興味を引き、かつ理解を得られるかを検討した。情報の示し方については、1) 情報の長さ、2) 研究論文の抄録・背景・方法・結果・結論などのうち、何をどのように示せば良いか、3) 学校教員に英語になじませるにはどのような方法が良いかについて検討した。どのような情報に教員が興味を示すか、また実際にどのような方法が興味を引きやすく、かつ理解しやすいかの情報、試行する方法への評価などは、研究代表者および研究分担者の周囲の学校教員へのインタビューを通じて得た。

(2) 教員の興味を引き、理解を得やすい情報の分野・内容、その示し方の検討が進み、ある程度形が整った段階で、学校保健の学会誌を活用して、実際に複数の英文研究情報を、研究内容と英語いずれについても親しみやすく分かり易い形で記事として掲載した。機縁法で依頼したさらに多くの教員に、この記事についての評価と感想を依頼し、逐次情報のまとめ方、説明方法のさらなる改善を進めた。

(3) このようにして研究内容と英語の解説方法、発信する情報のまとめ方を確かなもの

とした後、情報をより広く発信し、かつ発信した内容・方法への評価を得る web システムを構築した。

(4) なお、どのような分野の保健情報に教員の興味が集まるかについては、教員による違いはみられたが、多くの教員に共通していたのは精神保健に関する興味の高さであった。この回答には、研究代表者が精神科医であることへの「配慮」も含まれる可能性はあったが、近年の学校における精神保健問題の深刻化を考えると、実際の教員の興味を反映しているも可能性も高いと考えられた。このため、精神保健の分野、特に学校の児童生徒の年齢に該当し、かつ精神疾患の急増する年代でもある思春期の精神保健・精神疾患に関する近年の海外文献の紹介から始めることとした。

4. 研究成果

(1) 国際誌に掲載された英文の保健研究情報を学校教員にどのような形で紹介するかを、多くの学校教員からの意見、また教員の論文や英語の理解力を観察しつつ検討した。1) まず英語の問題については、個人差・年齢差はあるものの、全体としては学校教員の英文に対する抵抗感、慣れ・不慣れは大きく、「英文」というだけでその情報から目をそむけてしまう人も少なくなかった。このような状況での海外保健情報紹介は、単に日本語でのまとめを作って紹介する方法が最も簡単と考えられた。しかしそれでは、今後自立的に海外情報を得ようとする教員を多少なりとも増やそうという本研究の目的にそぐわないため、その方法の採用は見送った。代わりに、当初想定していた以上に基礎的なレベルでの解説を、多くの論文の抄録で頻出するフレーズに限り、かつできるだけ文章を短いフレーズに分けて(あるいは、不要な装飾フレーズを削除・短縮して)、多く繰り返し示す方法を採用することとした。なお、英語への抵抗感の強い教員の英語アレルギーをかって高めることのないよう、十分理解しやすく、手に取り易いものとなるように十分注意した。

ちなみに近年では、普通の会社員でも多少なりとも英語が分かる人が少なくない中で、英語への抵抗感の強い学校教員がこれほど多いことは意外であったが、普段の業務で英語に接する必要性がほとんどないこと、日常業務に追われて英語のスキルを高める余裕がないことなどが理由の一部かも知れない。なお大学院等で論文等を書いた経験のある教員の中には、英語の理解力をそれなりに備えた人もいた。

2) 保健研究情報の理解には、英語の問題だけでなく、研究デザインや統計に関する基本的な知識を知っていることが必要だが、この点についても相当な工夫が必要であった。理

科等の教員で普段自ら研究を行っている人などは、対照設定の意味を含めて研究デザインへの理解が高い人もいた一方で、大学教養レベルの統計知識もあいまいな人も多かった。このため、研究結果を理解するのに必要な研究デザインや統計の知識を身につけてもらうために、数式は一切利用せず、簡潔でシンプルな文章と模式図などを活用した分かり易い解説を、ごく基礎的なレベル(p値の説明等を含めて)から行う必要があると考えられた。これを複数の教員が出席する研修会・研究会等で繰り返し試み、工夫を進めた。

(2) 上記検討・工夫により基本的コンセプトが得られた説明内容・説明方法を用いた海外保健研究紹介を予備的に行い、それに対する評価を得てさらに改善を進める目的で、学校保健の学会(保健関係の現場教員の参加も多い、会員2000人規模の学会)の機関誌に国際誌に掲載された保健研究の紹介を連載企画として行った(佐々木・北川2017、佐々木2017、佐々木・小川2018)。研究代表者、分担研究者からの機縁法で協力が得られることとなった学校教員、ならびに教員養成系学部学生に、この記事を読んでもらい、評価を得た。まず内容や説明方法については概ね評価は良好であった。また研究デザインや統計の基礎知識解説については、読んでくれた人には概ね好評だった。英文とその解説については、最初の回では抵抗感があったようだが、2回、3回と回を重ねるうちにそれも低下していく感触が得られた。その間、説明方法にさらに改良・工夫を加えたことの効果もあるかもしれない。

(3) 学会誌での予備的な試みで改良を加え、ほぼ確定した方法での海外保健情報(研究論文)紹介を、より広いレベルで行い、かつ更なる改善のための評価を得るため、web上で公開するシステムを構築した。また希望する学校・自治体レベルで教員に情報配信ができるようにした。幸い、ある県から情報配信の希望があり、2018年前半からそれを行う予定となった。

(4) 2018-2019年度に行った本研究は、海外保健情報の重要性に対する学校教員の認識改善、海外文献への拒否感軽減と最終的には積極的に海外保健情報を教員が求めるようになるための、基礎的段階での試みである。目標を実際に達成するためには、本研究で工夫・作成し、教員に受け入れてもらえる目的のついたシステムを活用し、実際に情報発信と教員からのフィードバックを今後も重ねていく必要がある。

また、新たに発表された保健知識の理解のためには、研究デザインや統計などの基礎知識を教員が身につける必要がある。本システムでもその点について十分検討し工夫を重ねたが、どの程度の効果が得られたかは不確

かである。なお現在の教員養成では、このような知識を身につけるための授業は、基本的に行われていない。この点についての改善が、海外からの情報を含めて、レベルの高い新たな研究情報を自らキャッチし理解していくことのできる教員を育てる上で重要な課題と考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

佐々木司、小川佐代子(2018)「(学ネットいじめと従来型いじめの頻度に関するメタ解析 Modecki 他, 2014)」の紹介。(学校保健の新知見を学ぶ: 易しい英文論文読解, 第3回)。学校保健研究 59(5): 295-297 (査読無し)。

佐々木司 (2017)「思春期の子供の精神保健リテラシーに対する学校教育の効果: 非無作為化クラスター対照試験による検証 (Skre 他)」の紹介。(学校保健の新知見を学ぶ: 易しい英文論文読解, 第2回)。学校保健研究 59(5): 379-381 (査読無し)。

佐々木司、北川裕子(2017)子どもの頃のいじめ被害と成人後の精神疾患との関わり(学校保健の新知見を学ぶ: 易しい英文論文読解, 第1回)。学校保健研究 59(4): 295-297 (査読無し)。

〔学会発表〕(計1件)

山口智、佐々木司。学校教員が生徒の精神不調に気づく力を調査した論文の系統的レビュー。第10回日本不安症学会学術大会。早稲田大学東伏見キャンパス(東京)。2018年3月16日。

〔図書〕なし

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

ホームページ等:

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 司 (SASAKI, Tsukasa)
東京大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 50235256

(2) 研究分担者

大沼 久美子 (OONUMA, Kumiko)
女子栄養大学・栄養学部・准教授
研究者番号: 00581216

三木 とみ子 (MIKI, Tomiko)
女子栄養大学・栄養学部・名誉教授
研究者番号：80327957

(3)連携研究者 なし